

説教：イエスと共に歩むことは、光の中を歩むことである

OICの皆さんお早うございます。そして父の家によろこ

今日から使徒ヨハネの第一の手紙を始めます。聖書全体がそうであるように、この手紙も聖霊の靈感を受けたものです。前回のメッセージでは、パウロがエペソの信徒に、したがってすべてのクリスチャンに、「神の恩寵の栄光のために-素晴らしい服従と力をもってイエスと共に歩む」というクリスチャン生活を送るための指示を与えたことを聞きました。今週のメッセージは、「イエスと共に歩むことは光の中を歩むこと」と題しました。先週のメッセージはこう締めくくりました：

パウロの挨拶と手紙の結びは、1世紀の標準的な形式でした。しかし、彼の雄弁さと靈感は明らかです。サタンに対する神の戦いに加わるようにと何度も呼びかけた後、彼は次のように締めくくりました(エペソ 6. 23-24/KJ21)：「23 どうか、父なる神と主イエス・キリストから、平安と信仰に伴う愛とが兄弟たちの上にありますように。24 私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、恵みがありますように。」

使徒ヨハネがエペソから諸教会に宛てたこの手紙を書いたのは、パウロがエペソの手紙を書いた後から25年後のことです。パウロがローマでネロによって殉教してから約20年後のことです。ですから、エペソの教会は、ヨハネが一時期この町でミニストリーをしていた時の信仰を守っていたのでし

ょう。イエスの生涯に関するヨハネの福音書は、この手紙とほぼ同時期に書かれました。福音書とこの手紙の両方で、ヨハネはイエスの地上での生涯についての目撃証言に重点を置いています。ヨハネの書は、イエスが肉体をもって地上に来られたこと、すべての人と同じように人間の肉体をもっておられたこと、しかし地上の父をもたず、罪もなかったことを宣言しています。グノーシス主義という異端が社会、特にアジア州で流行しつつありました。1世紀のグノーシス主義者の基本概念は、物質的なものはすべて悪であり、神は善であるので、神は肉体を持つことがなく霊でなければならないというものでした。これは若いクリスチャンたちにいくつかの課題を与えました。グノーシス主義もまた、ギリシャ哲学、東洋の宗教、キリスト教を融合させたものです：こうしてシンクレティズム(混合主義)、つまり真実と嘘を混ぜ合わせ、新しい宗教を作り上げます。ハンス・ジョナスはその著書『グノーシス主義宗教』の中で、グノーシス主義の起源を指摘しています。彼によれば、ヘレニズム(ギリシャ)、バビロニア、エジプト、イランの起源、そしてこれらのありとあらゆる組み合わせ

せが、ユダヤ教やキリスト教の要素と組み合わせられ、グノーシス主義を1世紀の新しいシンクレティズム宗教にしたのだということです。東洋の宗教の多くは論理を否定し、信仰には経験のみを求めることを忘れてはなりません。

ヨハネの福音書は伝道的であり、ヨハネが次のように締めくくったように、特にキリストを持たない人々を救うことを目的としています（ヨハネ 20. 30-31）：「30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」

一方、このヨハネの手紙は、クリスチャンの主への信仰を励まし、彼らの救いの祝福された確信を強めることを目的としています。福音書と手紙の両原本には明らかな類似点があります。それはヨハネという一人の人間の著者がいて、聖霊が彼の心に真理をもたらしながら書いたからです。イエスは、使徒たちが聖書を書いていることに気づく前に、このことを約束していました。（ヨハネ 14. 26）でイエスは言いました：「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

では、（1 John 1. 1）を読みましょう：「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、」

ヨハネはまず、教会に忍び込んでいるグノーシス主義哲学に対する直接的な挑戦から始めます。グノーシス主義者は、尊敬を集める老齢の使徒ヨハネが、イエスの地上での生涯を目撃したと主張する、嘘つきだと言わなければなりません。

ヨハネはその福音書の中で、始まりを指し示しています。（ヨハネ 1. 1）にあるように、これは時の始まり、あるいは、確かに時が始まる前です。：「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」しかし、グノーシス主義者の信仰に対する攻撃は、イエスの神性、あるいはイエスは肉体を持った神であるというキリスト教徒たちの主張に対してというよりも、時間の概念に疑問を投げかけることを目的としていました。

イエスは言葉であり、言葉は神であった。アメリカでは1931年、エホバの証人の異端が拡大し始めた。彼らは、ヨハネが書いたオリジナルのギリシャ語新約聖書を持っており、そこにはこう書かれていると言っていました：「言は神のようであった。」

ギリシャ語新約聖書

（NTG）は、ヨハネが書いたように読みます：ことばは神とともにあり、神はことばであった。このように、真の聖書は、神と同じでなく、神と等しいイエスの神性に反論する余地を与えないのです。

さて、グノーシス派の異端に立ち向かうために、ヨハネは次のように書いています (1 ヨハネ

1.1) : 「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの (イエス)、すなわち、いのちのことばについて、」 (ルカ

24.39) で、イエスが死者の中から復活された後、弟子たちに二度目に現れたとき、トマスに言われたように「わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」イエスは復活の前、肉と骨と血を持つ神でした。イエスは、肉と骨を持ち、しかし血のない復活した体においても神でした。このように聖書は、イエスの復活した体も肉と骨があり、血はなかったのです。彼らが触れ、感じた人間であり、単なる「霊」ではなかったと教えています。イエスの復活した肉体は、まだ現れたり消えたり、固い壁を通り抜けたりすることができました。

(1 ヨハネ 1.2) : 「——このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。——」。ヨハネは今、御子なる神についてのシンプルで力強い知識、すなわち神学を教えています。イエスを見ることは、永遠の命を見ることです。ヨハネはこのことを(ヨハネ 14.6) でいいます：「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」イエスが父への「道」であることを知ることは非常に重要です！しかしイエスは、**命への道**だけではなく、イエスとその命ということを知ることは重要です。彼ら、使徒たちが見たもの、イエスとその福音を宣べ伝える時、彼らは永遠のいのちを宣べ伝えました。そして今日、私たちがイエス・キリストと十字架につけられたイエス・キリストを宣べ伝えるときはいつでも、**永遠のいのち**を宣べ伝えているのです。今日、福音を信じることは、イエスが肉を持って地上におられたときにイエスを見ることと同じです。その結果、永遠の命は、御父とともにあり、私たちに現され、そして今、すべての信者に現されているのです！

(1 ヨハネ 1.3) : 「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと**交わり**を持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」

交わり - ギリシャ語で(1 ヨハネ 1.3/NTG)は意味します：「交わり、人と人との親密な関係。この交わりは、クリスチャンとのみ、あるいは場合によっては、イエスの福音や良き知らせの宣言を求め、喜んで聞く罪人とのみ、という条件付きであることに注意してください。クリスチャンにとって、この「人と人との親しい交わり」をこのような条件に限定することは非常に重要です。私たちが罪人と「付き合う」時はすべて、私たちのミニストリーの必要条件か、「個人的な」伝道のためのものでなければなりません。

父と、そして御子イエス・キリストと。私たちクリスチャンは、御父や御子イエス・キリストと本当に「親しく付き合い」、交わりを持つことができるのです。そう、御父と御子が私たち神の子たち全員とどれほど個人的な関係になりたがっているかを理解することは、御父と御子に対する敬意の欠如ではありません。

(1 ヨハネ 1.4) : 「私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。」。先に述べたように、ヨハネの福音書はその目的と焦点において伝道的であったが、この手紙は、イエスを信じるすべての人を励まし、喜びに満ち溢れさせるためのものである。私たちの喜びというのは、信者になった人たちが喜びを持たなければ、宣教師たちの喜びは完全ではないという意味です。信者たちをキリストに導いた宣教師たち、つまりヨハネとその同僚たちである。ヨハネの喜びが満ち足りるかどうかは、彼のもとに与えられた羊たちが、「イエスは私のもの」という祝福の喜びを持つかどうかにかかっています。この有名な賛美歌に書かれている言葉は、ファニー・コスビーによるものです。あるいは、**(第一ヨハネ 1.4/AMP)**にはもっと明確に書かれています。：「私たちがこれらのことをあなた方に書いているのは、私たちの喜び（あなた方が含まれているのを見ること）が、（あなた方が救いの喜びを分かち合うことによって）完全なものとなるためです。」

祝福された保証 - イエスの血の犠牲を信じる信仰によって、赦された罪人、聖なる聖人となる喜び。 **(マタイ 13.44)**でイエスが説明してるように：「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」つまり、罪人がイエスに赦しと永遠の命を見いだし、以前は生きているように振る舞っていたが、内面では死んでいたことに気づくとき、心の奥底にあるイエスの喜びのために、喜んで古い人生を明け渡すという意味です。生まれ変わったクリスチャンは皆、この「賜物」を守るために自分のすべてを売る価値があると感じています。それはかけがえのないものです！詩編の作家が**(詩篇 107.9)**で言うように：「まことに主は渴いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。」

今朝、イエスに導かれてドロシーと私は古い賛美歌『Satisfied, All My Life I Had Panted』を歌いました。最近、ある若いクリスチャンが誠実で良い質問をしました。ブルース牧師、『満足するとはどういうことですか？使徒パウロは、天の父が約束してくださった物質的な備えに関して満足することだと答えました。これらは御子イエスを通して私たち信者に与えられています。：しかし、パウロが**(ピリピ 4.11-12)**でこの質問に答えた理由は何でしょうか：「11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にも知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」

使徒パウロの答えの背後にあるのは、彼がイエスを見つけたからであり、もちろん、私たちすべてのクリスチャンがそうであるように、本当にイエスが彼を見つけました。

栄光へのイエスとの歩みにおける祝福された保証は、ユダが(ユダ 1. 24)で述べているように、私たち自身ではなく、イエスにかかっています：「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に」、

ハレルヤ、私は長い間私の魂が切望していた主を見つけました。 イエスは私の切望を満たし、イエスの血によって私は救われました。

つぎは (1 ヨハネ 1. 5)を読みましょう：「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」これはヨハネの福音書、パリサイ人ニコデモに対するイエスの言葉 (ヨハネ 3. 18-20) と類似しています：「18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」

次にヨハネは、「クリスチャン」を自称する人々の行動によって、光と闇をさらに描き出します。

(1 ヨハネ 1. 6)：「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。」

暗やみを歩く— 使徒パウロがエペソのクリスチャンたちに次のように教えています。(エペソ 5. 11)：

「実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。」 暗や

みの定義は、「この世ではなく聖書に委ねなければならない」と題した最近の私の説教から引用し

ます。9月9日の「神の恵みの栄光のために—イエスとのより親密な歩みのために」：(エペソ

5. 11-12)：「暗やみの実を結ばない行い(ギリシャ語新約聖書-σκότος、スコトス skotos)とは

一切関わりを持たず、むしろ暴露しなさい。12 不従順な者がひそかに行くことに触れることさえ、

恥ずべきことである。」 Skotos スコトスとは、光(神)の領域に対すして、闇(サタン)の霊的領

域を指します。(ヨハネ 1. 4-5)で主イエスが世に入られた時のように：「4 この方にいのちがあっ

た。このいのちは人の光であった。5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかつ

た。」

さて、(1 ヨハネ 1. 6)において、使徒ヨハネの暗やみの定義が使徒パウロのそれと同じであったこと

とは確かです！ 実際、私たちはヨハネが福音書(ヨハネ 1. 4-5)に記したことまで遡ることができます：

「4 この方にいのちがあつた。このいのちは人の光であつた。

5 光はやみ(skotos),の中に輝いている。やみ(skotos) はこれに打ち勝たなかつた。」

それゆえ、ここでヨハネの第一の手紙では、パウロは、クリスチャンたちが、明らかに「暗闇の行い」（ギリシャ語、σκότος、スコトス）を実践しているかのような見掛け倒しの「イエスとの歩み」をしてはならないと教えているのである。

私たちは嘘をつき、真理を実践していない。 - このように、見掛け倒しのクリスチャンは嘘つきです。というのは（1ヨハネ 1.6）にこうあるからです。：「もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。」

真理を実践する - つまり、教会だけでなく、日常生活でもイエスの真理を行うことです。

「ブルース牧師、暗闇の中を歩くために戻ったクリスチャンは永遠に失われるのですか？」と質問するかもしれません。「私は信じます！そうではありません！」しかし彼らが悔い改め、光であるイエスのもとに戻ってきて、赦しを乞うならば、です。なぜなら、彼らはイエスの心を傷つけ、聖霊を悲しませたからです。故意に暗闇の業を歩み続けることを決めることは、神の忍耐を限界まで試すことです！

（1ヨハネ 1.7）：「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」**光の中を歩むことを選ぶ者は、イエスと手に手を取って歩みます。**

私たちは互いに交わりを持ちます - 交わりは、人と人との親密な結びつきであり、私たちクリスチャンがこの世で経験できる最も喜びに満ちた体験の一つです。イエスとの交わりのみの時が、他者との交わりもさらに素晴らしいものです。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます - （1ヨハネ 1.7）の「まだ暗闇の中を歩んでいる、私たちは嘘をつき、真理を実践していない」ということと、「イエスの血による罪からのきよめが必要である」ということとは、明確な線引きや区別をしなければなりません。私はローマ書で、罪人は神の敵であると説きました。

罪人は暗闇の中を歩いているが、彼らはクリスチャンだとは言っていません。私たちは、罪人が光の中に導かれるように祈ります。罪を犯しているクリスチャンは神の敵ではなく、やはりクリスチャンであり、神の目には聖なる存在です。彼らは、人間的な弱さを持ちながらも、イエスを愛そうとする心を持って、最善を尽くして歩んでいます。

また、光の中を歩むクリスチャンは罪を選んでいないわけではないのに、いつの間にか罪が彼らを選んで見えることがあります！神はすぐに赦してください、イエスの血の力が彼らを光の中を歩ませ続けてくださいます。これはまさに私たちの救いのもうひとつの喜びです。ハレルヤ、私は私の魂が長い間切望していた主を見つけました。イエスは私の切望を満たし、イエスの血によって私は救われました。

(1 ヨハネ 1.8) : 「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうち
にありません。」パウロは、私たちには罪がないと言いました。「この聖句の意味を理解するた
めに、ローマ書7章と8章に記されている、パウロの自分自身に対する苛立ちと同時に、赦しの栄光の
喜びに立ち返ることにしましょう。(ローマ 7.15-18) : 「15 私には、自分のしていることがわかりま
せん。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。
16 もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。
17 ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。
18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をした
いという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」

私たちが見ている(1 ヨハネ 1.8)を強調する鍵は、ローマ人への手紙7章、特に(ローマ 7.15)詳細
があります。：ですから、もはや私がそれを行っているのではなく、私の内にいる罪の聖です。使
徒パウロは、罪が{彼}の中に宿っていることをすべての人に明らかにしています。使徒ヨハネ
は、真のクリスチャンであれば誰でも、聖人に生まれ変わってしばらくすると、自分の中に罪が宿っ
ていることにすぐに気づくことを知っています。それゆえ、キリストを公言する人に対するヨハネ
のテストは、自分の中に罪が宿っていることを認めることです。だから

(1 ヨハネ 1.8) : 「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうち
にありません。」 真のクリスチャンは、自分には罪がないと主張しないという意味です。偽の
クリスチャンはこう主張するかもしれませんが、それは明らかな自己欺瞞です。しかし親愛なるOIC
の聖徒の皆さんに、恵み深い神から良い知らせがあります。(1 ヨハネ 1.9) : 「もし、私たちが自
分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをき
よめてくださいます。」

ブルース牧師、この説教を含め、多くの説教の中で、なぜローマ人への手紙7章の教えを繰り返し、
多くの時間とスペースを費やしてきたのですか?と聞くかもしれません。牧師の答えは項です：若
いクリスチャン、あるいは十分に教えられていないクリスチャンが、イエスとの歩みの中でまだ持っ
ているかもしれない5つの重要な真理があるからです：

1) そして間違っって言う：「私は罪を犯したので、本当のクリスチャンではありません。」しか
し、故意に罪を犯す生活習慣が、暗闇を歩いている偽りのクリスチャンか、あるいはイエスから離れ
て後退しているクリスチャンのどちらかを示します。あなたの牧師を含む多くの若いクリスチャン
は、ローマ人への手紙7章にあるこの「私の内にある罪」という真理の教えが明らかになるまで、罪
を犯した後の自責の念に苦しんでいました。特に(ローマ7.15)の「今や、罪を犯しているのはも
はや私ではなく、私のうちに宿っている罪なのです。」が明確に理解するまでです。

2) また、間違ってこうも言う：「私には、罪から私をきよめるイエスの血潮がいつでも用意されているので、罪を犯さないように努力したり、努力したりする必要はない。」すべての罪は、無計画であれ、故意であれ、イエスを十字架につけたのです。そのことを軽んじてはいけません！ 私たちが罪を犯すとき、私たちのために罪となられたイエスのお気持ちを傷つけてしまうのです。(2 コリント 5.21)「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」

3) また、間違ってこうも言う：「赦された罪には結果がない」ダビデ王は、姦通と殺人の罪によって、ユダとイスラエルの両方の王に即位した後に生まれた最初の子供と、家族の健全な平和を失いました。このような家族間の確執は、自分の息子たちの間で殺人を引き起こし、息子のアブサロムが始めた内戦によって、国家の不安定をも生み出しました。預言者ナタンがダビデの罪について主からダビデ王に下された裁きを(2サムエル 12.9-14)で読むことができます。：「9 それなのに、どうしてあなたは主のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪を行なったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。10 今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。』11 主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上におざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。12 あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』」13 ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。14 しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

ダビデ王の罪は、バテシバへの目の欲望から始まり、その罪を覆い隠そうとして、彼女の夫であるヒッタイト人ウリヤの殺害に影響を及ぼす綿密な計画を必要としました。イエスの十字架以前、主は憐れみ深かったのですが、神が教会に御霊を注いで以来、今が恵みの時代と呼ばれるのには理由があることを忘れてはいけません。もしダビデが故意に姦淫の罪を犯した後、赦しを求めたなら、神はもっと軽い裁きを下したかもしれないと考えるのは、私たちの憐れみ深い神を擁護することになります。しかし、人に罪を隠したことが、王が殺人という故意の罪を犯すという戦略につながったのは明らかです。私はあなたの家族から、あなたに対して悪を起こす」という神の裁きがありました。事実、その神のことばの通りにダビデの家庭生活には、近親相姦、殺人、王を転覆させるための反逆がありました。この戦争のような出来事は、ダビデ王の家族を何年にもわたって混乱に陥れました。また、ダビデの子供たちは、主だけを礼拝し仕えるという彼の模範に従いませんでした。その中には、次の王、ダビデの息子ソロモンも含まれていました。ソロモンの偶像崇拜と彼の息子の傲慢は、ダビデの死後、王国をイスラエルとユダに分裂させました。神はイエスのために私たちを赦してくださる

のだから、私たちの罪、特に故意の罪に対して結果がないと考えることはできない事が分かるでしょう。

4) また、間違っ**て**こうも言う： 罪を犯したクリスチャンには、御言葉がある！ この恵みの時代には、罪を犯したクリスチャンは、御言葉によって、（ローマ 7.15）にあるように、意志によらない罪を示すことができるのです。「だから今、罪を犯しているのはもはや私ではなく、私の中に宿っている罪なのだ。」そして、私たちには御霊がいる。御霊は、私たちに罪を確信させ、私たちの罪が故意であったか、故意でなかったかを心の奥底ではっきりさせてくださる。クリスチャンは、御霊に確信させられたらすぐに、故意であろうとなかろうと、すべての知っている罪を告白しなければなりません。故意でない罪、「ローマ人への手紙 7 章の罪」については、自己非難と悪魔の機会を防ぐために、ローマ人への手紙 7 章 24 節にある次の聖句の少なくとも一部を告白しながら神に祈ることをお勧めします。：私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」腐りかけた死体、罪を想像しながら！そして 25 節：「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝します！ 神がお聞きになりたいのは、あなたの真実な告白と罪に対する憎しみであって、自己に対する憎しみではないのです。また、ローマ人への手紙 7 章の結論を神に感謝します。（ローマ 8.1）：「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」イエスは、私たちが告白した罪の赦しの約束を受け入れなければ、故意であろうとなかろうと、怒ります。

5) そして間違っ**て**言う：「私はどうしても罪を犯してしまう。いいえ！クリスチャンは生まれ変わった瞬間から、生涯、二度と故意の罪を犯すことはないのです。」

教訓その 1

神は、罪を犯しながらも告白するクリスチャンをすぐに赦してくださいます。イエスはクリスチャンのために赦しを買って出てください、イエスの血の力によって私たちは光の中を歩むことができます。ダビデ王は私の心に適う人であったと主は言われましたが、罪によって彼は長子の命を失い、王国の半分が彼の血統から取り除かれました。神がクリスチャンに御霊を与えられたのは、私たちが神に属しているという確信を与えるためだけでなく、私たちがすべての罪を知り、告白するのを助けるためでもあります。私たちの罪が故意によるものか、故意でないものかを示してくださるのです。どんな罪も赦されることは、まさに私たちの救いのもうひとつの喜びです。ハレルヤ、私は私の魂が長い間切望していた方を見つけました。イエスは私の切望を満たしてくださり、イエスの血によって私は救われました。

(1 ヨハネ 1.10) : 「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」 これは、自分は罪を犯したことがないと主張するのに十分な「善人」であると考える罪人や偽クリスチャンに向けられたものです。すべての真のクリスチャンは、悔い改めてキリストを救い主として迎え入れたとき、聖なる神に対する自分の罪を確信したのです。

生まれ変わったクリスチャンは、一生故意に罪を犯すことはないのです！

(1 ヨハネ 2.1 - 2) : 「1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。2 この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。」

あなたは罪を犯すかもしれません。 - 元々のギリシャ語の「for you may not sin」には、真理にはこの素晴らしい力があるのだが、殆どの翻訳には、その事を示していないのはなぜかと質問しないでください。原語のギリシャ語 (NTG) の for you may not sin は、- hamartēte | ἁμάρτητε | aor act subj 2 pl 。ギリシャ語のアオリスト能動接続法では、「二度と罪を犯さないだろう」と訳されています！すごい。これは、罪への許可がないだけでなく、二度と故意に罪を犯さない力を持っているので、罪から解放される自由があり、その状態を保つことが出来ると言う意味です。OICの聖徒の皆さん、それは可能です。もし可能でなかったら、聖霊は「可能です！」とは言わなかったでしょう。イエスの霊に満たされ、肉体を持っておられたイエスに弟子入りした使徒ヨハネの心は、イエス信者は自分自身を低く見すぎる傾向があり、そのため、故意の罪から彼らを守る主イエスの力を低く見すぎることを知っていました。ヨハネは、すべてのクリスチャンに、人生のあらゆる場面で罪に打ち勝つために、自分たちがどれほど大きな立場に置かれているかを自覚してほしかったのです。そこでヨハネは、ギリシャ語のアオリスト能動接続法を用いて、「二度と罪を犯さないだろう」と書きました。イエスが私たちのために生涯をかけて、十字架上でそれを成し遂げてくださったので、私たちはイエスを通して毎日それを行うことができます。

そして、もしだれかが罪を犯すなら、私たちには父との弁護者、すなわち義なるイエス・キリストがいます。今は(ローマ 8.1)に移りました。 : 「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

ヨハネは、私たちが二度と故意の罪を犯すことがないように、イエスと親しく歩むことについて私たちを興奮させ、そして、その希望を律法にしまわれないように、全能の父なる神の右の座にある天の弁護者をクリスチャンに保証しています。イエスご自身が私たちの赦しを保証して下さる。私たちの罪のためのなだめの供え物とされました。つまり、イエスは、世の罪を取り除く神の小羊となることによって、罪を取り除く血のいけにえに対する神の正しい要求を鎮められたのです。そ

う、使徒ヨハネがイエスの福音書の（ヨハネ 1.29）に、洗礼者ヨハネがこう書いたことをおもいだします：「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

ハレルヤ、私は長い間私の魂が切望していた主を見つけました。 イエスは私の切望を満たし、イエスの血によって私は救われました。 イエスを信じる OIC 信者たちよ、ドロシーと私とともに喜んでください！ これこそ、光の中でイエスとともに歩む喜びです！ ...でも待って。ヨハネは、これをどの様にして保つのかという秘訣を書いています。私たちの喜びは、聖霊の力、愛の重荷にあり、律法ではなく、イエスが彼らの罪のためにも死んでくださったことを全世界の人々に伝えることです！ やりましょう！

祈りましょう！

参考文献

KJ21- 21st Century King James Version, Copyright © 1994 by Deuel Enterprises, Inc.

NASB1995 - New American Standard Bible®, Copyright © 1960, 1971, 1977, 1995 by The Lockman Foundation. All rights reserved.

NTG - Novum Testamentum Graece/ Nestle-Aland, Printed in Germany 1898&1979

The Gnostic Religion - The Message of the Alien God and the Beginnings of Christianity,
Hans Jonas, Beacon Street, Beacon Hill, Boston USA, 1958.